

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁷⁷

人質事件が浮き彫りにした世界認識欠如の「変な国ニッポン」

昨年の4月に日本人質事件が起こってから、一年が経つ。その間に拉致された米国人や韓国人が首を切断されて殺害されたり、ジャーナリストの橋田信介さんら二人が銃撃されて命を落とし、日本人のバックパッカーの若者も首を切断されて殺害される事件が発生している。さまざまな言説が飛び交ったが、そこでくっきりと浮き彫りにされたのは、人質になってバッシングを浴びた者も浴びせた者も含めて、我々日本人の成熟度であった。いいかえると、そこには日本のなかでしか通用しない党派性が、批判するにせよ共鳴するにせよ、臆面もなく曝けだされているだけのことであった。もっとはっきり言うと、人質になった者たちの手落ちに対する批判の中に、どこまで自分を映しだす鏡をみていたか、ということなのだ。

人質になった高遠菜穂子さんは帰国してから、「イラクで危険な目に遭うのは覚悟していたからいい。でも、日本に帰ってきてマスコミに対応する覚悟はできていなかった」（『週刊朝日』04・5・21）と語っている。この言葉は、「イラクで危険な目に遭うのは覚悟していた」が、日本に帰ってきてバッシングに遭う「覚悟はできていなかった」と聞き取ることができる。ここから、日本の若者たちが「イラクで危険な目に遭う」のを覚悟してまで、どうしてイラクに赴くのか、つまり、安全な日本から出国したがるのか、という問いに対する答えが見出せるように思われる。安全な日本は安心できる国ではないことが感じられていたからこそ、若者たちは競うようにして日本から出国したがるのではないのか。若者たちにとって、もはや日本は居心地のよい国ではなくなっている。海外で「危険な目に遭う」ことのほうを選んでもよいと思うほどに、日本に若者たちの居場所はなくなっている。そういうことではないか。

高遠さんの先の言葉は、自分たちを手酷くバッシングするような国だったんだ、ということ強く思い知らせることによって、だから彼らが日本から出国することになんのためらいも抱かなかったことを改めて再確認させるような響きを帯びていた。更に、人質に対する日本国内のバッシングには、サマワに派遣されている自衛隊の復興支援活動に日米同盟のシンボリックな意味合いがあるだけで、それ以上の中東アラブ世界に国際戦略として足を踏み入れるという世界認識が全く欠落していたのと同様に、日本を越える世界認識は僅かも見出されなかった。内輪喧嘩が恥も外聞もなく、大っぴらに繰り返されたのだ。高遠さんと同じ人質になった今井紀明さんの、「今でも僕は『人質事件』というより『拘束事件』だと思っています。イラクでは拘束事件が、日常的に起こ

っているんです。米軍によってイラク人が何人も捕まっています。それも1カ月も2カ月もの間、僕らよりひどい状態で拘束されている。彼らの家族は、僕らの家族が味わったような思いをしているんだということ、そしてその事態に日本が手を貸しているということ、多くの人に知ってもらいたいと思います」(『週刊現代』04・5・22)という帰国してからの発言は、イラクで日常的に起こっている「拘束事件」と同列に自分たちの「人質事件」を置くことによって、日本人の「人質事件」としかみない日本国内の世界認識を全く欠いたローカルな反応を浮かび上がらせていた。

世界認識はもちろんのこと、人質になった者たちが多くの苦しみを味わい、さまざまに深く考えざるをえなかった点においても、バッシングを浴びせた側の無内容な思考停止状態ははるかに及ばなかった。高遠さんは『『生かされた命』に苦しんだこの3カ月』と題する独占手記(『婦人公論』04・8・7)のなかで、こんなことを書いている。

《解放されてから3カ月が経った。生まれ故郷の日本に帰ってからも、心が休まることはなかった。正直言って今もない。日本でのバッシングを受けて、私はイラクで何をやっていただろう? と思った。すべてが消えてなくなってしまったような気がした。自分の一番奥にあった魂の存在とその叫び、それさえも失くしてしまったような気がした。私は「生かされた命」を持て余して、母に何度も「私なんて殺されればよかったんだ!」と泣き叫び、母は私を叩いた。私はイラク人の命の痛みを、目と鼻だけじゃなくて身体で知ってしまった。なのに、今まで何をやってきたのか、私は本当にイラク人と対話をしてきたのかどうかもわからなくなってしまった。私の苦しみなんでイラク人の足元にも及ばないけれど、何もできないことが辛かった。

自衛隊が派遣され、私たちが人質となって、日本とイラクは近くなった。お互いに知らないことが多すぎるまま、イラクと日本は強烈な運命を共にすることになってしまった。日本の居酒屋で酒を飲みながらイラクのことを話していても爆弾が落ちてくることはないが、イラクでは昼ご飯を食べている時に爆弾が降ってくることがある。この1年、私はイラクと日本で半年ずつ暮らした。だんだんと、イラク人は日本人の身代わりなのかもしれないと思うようになっていた。日本人にとってイラクは世界への扉で、その扉を開けないとすぐそばにある命の尊さに気づくことができないのかもしれない。苦しんでいる人の叫び声は小さい。その声に気づいたとしても、心を傾けて必死に聴こうとする努力を私たちはいつも後回しにしていまいがちだ。命に言語も国境もないと私は思う。今、私たちに必要な能力は、英語ではなく「心の言語」なのだと思う。》

否定するにせよ肯定するにせよ、派遣された自衛隊を通じて日本は紛れもなくイラクの地に踏み入った。軍事活動を伴わない人道復興支援活動であろうと、日米同盟に強力的に後押しされたシンボリックな自衛隊派遣であろうと、戦後初めて日本はイラクという戦時下にある他国に足を踏み入れたのである。同様に、彼女たちも戦後初めて身代金を名分としない武装勢力の「人質」となることによって、日本人としてその世界の闇に触れ

てしまったのである。そのようなあり方について、彼女は《お互いに知らないことが多すぎるまま、イラクと日本は強烈な運命を共にすることになってしまった》とみる。もし自衛隊が日米同盟に後押しされて派遣されていなければ、「人質事件」は起こりえなかったかもしれないという意味で、「人質」となった彼女たちは自衛隊が派遣されたことの代償にほかならなかった。彼女たちは「人質」となることによって、自衛隊派遣の代償を払わされていたとみられる。

今井氏が、自分たちが「人質」になったことは、イラクで日常的に起こっている「拘束事件」の一つにすぎず、米軍によって惹き起こされているイラク人「拘束事件」と同等の比重で自分たち日本人の「人質事件」を取り扱わなければ、「人質事件」の背後に「拘束事件」が累々と横たわっている関係がみえず、したがって、悶え苦しんでいる日本人の「人質事件」の家族の背後に、「拘束事件」に巻き込まれて悲嘆に暮れている多くのイラク人の家族の姿を覗き込むこともできないと述べたことを引き継ぐように、高遠氏は、《イラクと日本で半年ずつ暮ら》すうちに、《イラク人は日本人の身代わりなのかもしれないと思うようになっていた》と記す。これはどういうことだろう。どうして《イラク人は日本人の身代わりなのかもしれない》のか。

彼女は前段でこういう。《日本の居酒屋で酒を飲みながらイラクのことを話していても爆弾が落ちてくることはないが、イラクでは昼ご飯を食べている時に爆弾が降ってくることがある。》だから、平和に恵まれている日本は、戦禍を被っているイラクのような国があることに、あるいは日本が悲慘に満ちている世界の中でどれほど恵まれているかにたえず思いを馳せなくてはならないなどと、たぶん彼女はいおうとしているわけではない。彼女が、《イラク人は日本人の身代わりなのかもしれないと思うようになって》たのは、日本の平和はイラクの国のような戦禍によって贖^{あがな}われているのではないかと思うようになったということだ。もっといえば、日本の平和というものは、戦時下のイラクでたえず起きている日常的な惨事によって維持されているのではないか、ということなのだ。

イラク人が被っている災禍は日本人が享受している繁栄と平和の裏面で進行している対極的な事態なのかもしれないと考えるなら、確かに《イラク人は日本人の身代わりなのかもしれな》かった。日米同盟によって自衛隊が派遣され、米国とイラク（アラブ）の関係の悪化によってイラクが攻撃されているとみるなら、イラクと米国の関係の敵対の度合いだけ、米国と日本の親密さの度合いも増さざるをえなかったといえる。この見方をもっと押し進めると、イラク（や他の国）が攻撃されている間は日本は安泰であることができ、日本が安泰である間はイラク（や他の国）が攻撃されていることになる。少なくとも世界は笑っている人の裏側で泣いている人がいることで成り立っているのだ。

日米同盟の強化とは、そうせざるをえなくなるほどに米国との敵対関係が世界のなかで鋭くなってきていることを意味する。米国とイラクの敵対関係が頂点に達して米国はイラクに侵攻し、日米同盟に引きずられた日本は米国のイラク占領政策の一環を担うよ

うにして、自衛隊を派遣することになった。自衛隊の派遣と同時に、民間人も自らの意思で自分をイラクに派遣することになった。そして日常頻繁に「拘束事件」が発生しているイラクの地で、当然のようにして日本人の「人質事件」が湧き起こった。日本も日本人ももはやイラクに対しては傍観者的な位置にとどまることはできず、当事者（国）になることによって一気に《日本とイラクは近くな》り、《お互いに知らないことが多すぎるまま、イラクと日本は強烈な運命を共にすることになってしまった》のだ。

日本の戦後は代償を払わずに歩んできた。いや、代償を払ってはきているのだが、その代償があまりにも少ないためか、ほとんど意識されずに戦後の平和と繁栄を享受してきた。戦後初の自衛隊派遣と「人質事件」は、それがどんなに不本意なかたちをとろうとも、日本が世界にかかわっていくためには自らの身を切る代償と覚悟が不可欠であることを物語っていたのである。別の言葉でいいかえてみる。自衛隊派遣と「人質事件」は、日本（人）が自らの外へ飛び出すことになったという意味で、戦後初の大事件であった。同時に、内に引きこもっていた代償と覚悟も初めて自らの外に晒されることになった。飛び出した地が戦禍のイラクであったなら、《日本人にとってイラクは世界への扉》ではないのか、と高遠氏は指摘しているのである。

日本（人）はまず自らの外へ飛び出すことになった。一体、どこへ？ 世界である。飛び出した地はイラクの地であったけれども、そこは世界であった。だからこそ、《日本人にとってイラクは世界への扉》ではあったにちがいないが、サマワの宿営地に閉じ籠もったままの自衛隊と、「人質事件」で噴出した嵐のようなバッシングは、自衛隊派遣と「人質事件」によって日本（人）は自らの外へと飛び出したにもかかわらず、どこにも飛び出していなかったのではないか、という疑念を大きく提出することになった。日本のなかで引きこもったまま育成されてきた自衛隊は、引きこもったままイラクに派遣され、引きこもったまま人道復興支援活動に従事する羽目になった。同様に「人質事件」もまた、バッシングと「迷惑論」と「自己責任論」の大合唱によって、国内問題へと回収されていった。

バッシングと「自己責任論」の噴出はもしかすると、日本人の国民感情の底に自衛隊派遣とそれに連動する「人質事件」によって、いきなり世界のど真ん中に押し出されてしまった戸惑いと恐怖心が巣くっていることを露わにしていたのかもしれない。それだけではない。そのことに伴う代償も覚悟ももっていないことを示していたのかもしれない。「迷惑論」とは、「人質事件」によって自衛隊派遣に重なるかたちで、自分たち日本人が戦後初めて日本の外へと連れ出されることに対する「迷惑論」であり、「自己責任論」とは、「人質事件」によって日本（人）全体が世界に巻き込まれることに対する自己完結的な切断の処理の仕方であったのかもしれない。いずれにしろ、戦前、戦後を問わず、日本（人）は他国の人々と同様に、すでに世界の関係に巻き込まれてしまっているにもかかわらず、そのことを意識せずに平和と繁栄を享受してきた日本（人）の引き

こもり状態が打破されることへの脅えが、バッシングや「自己責任論」の唱和の裏にこびりついているのが感じられる。

結局のところ、自衛隊派遣と「人質事件」によって炙りだされたのは、日本（人）の世界認識の欠如であり、どのように非難されようとも、世界認識は人質になった者たちに寄り添っていたという事実である。もし「人質事件」を世界認識から切り離して捉えるなら、どのようにみえるか。『ニューズウィーク』（04.5.5/12）のジェームズ・ワグナー副編集長は、「人質『いじめ』の残酷さと見苦しさ」（表題、全文）しか見出されないと、こう述べる。

《イラクの日本人人質事件は、ひどく後味の悪い事件だった。人質が解放されれば人々は喜び、帰国が大きく報じられ、騒ぎは静まるのだらうと私は思っていた。まさか人質が犯罪者のように扱われるとは予想もしなかった。

だが現実には起きたのは、その「まさか」だ。政府は人質救出のために手を尽くしていると大騒ぎした後、小うるさい教師のように人質たちに説教しはじめた。

「自己責任」について、もったいぶって語る政治家もいた。先週、一部の閣僚が国民年金保険料を払っていなかったことが発覚したことを思えば、お笑いぐさの発言だ。政府のいう「自己責任」は、命の危険を冒してまでイラクで援助活動を行おうとした活動家の倫理的な責任感とは何の関係もない。

いや失礼、問題なのはお金のことだった。人質を攻撃する武器として、あるいは他の人々への警告として使われる「金額」に転化された5人の市民の命のことだ。

彼らの後に続こうとする人を思いとどまらせることが目的なら、単に「今後、救出費用は自己負担していただきます」と言えばいい。政府はむしろ、人質をさらし者にしたいようにみえた。これは「無鉄砲」な国民に対する教育などではない。ただの「いじめ」だ。

政府の反応以上に私がショックを受けたのは、一部の市民が人質に投げかけた毒気のある言葉だ。のど元にナイフを突きつけられた人質とその家族の心理状態がいかに傷つきやすいかは、専門家でなくてもわかるはずなのに。

彼らがイラクに入ろうとしたことをどう考えるか（私は疑問を感じている）はともかく、今は追い打ちをかけるべきではない。「自己責任」で酒を飲み続けて依存症になった人が苦しんでいるときに、それ以上非難するのは無意味で残酷で、見苦しいだけだ。》

戦時下の危険な状況にあるイラクに入ろうとした人質たちの行為に《疑問を感じている》筆者の目にすら、政府の仕打ちや一部の市民によるバッシングは《ただの「いじめ」》にしか映らなかったことが明言されている。政府として人質やその家族に対して言いたいことがあれば、はっきり言えばいいし、人質の行動に対して市民が異和感を表明するのも自由であった。しかしながら、筆者が述べるように、人質に対する政府の不満や市民の異和感にしても、《人質が解放されれば人々は喜び、帰国が大きく報じられ》れば、《騒ぎは静まる》というような、国民の共通感情がその根底になければならなかった。

ところが、政府の仕打ちや市民のバッシングは人質の解放を喜ぶよりも、あたかも敵対者に向けられるような、人質が解放されずに死ねばよかったといわんばかりの露骨な悪意と憎悪に満ちていた。つまり、誰の目にも《ただの「いじめ」》にしか映らなかった。政府の仕打ちや市民のバッシングからは、今後考えなくてはならないどんな教訓も有意味さも引きだしえなかったからだ。日本的な作法にとらわれていない外国人からすれば、より一層《ただの「いじめ」》にしか映らなかっただろう。

日本人質事件は、人質に対する政府の仕打ちや市民のバッシングを引きだすことによって、日本という国や日本人がどのような人々であるか、ということを一挙に照射することになった。国際社会のなかで顔がみえてこないと従来からいわれつづけてきた日本（人）が、人質（事件）に対する反応によって、どんな顔をもつ人々であるか、をくっきりと浮かび上がらせてしまったのだ。人質に対する日本（人）の反応を知ったとき、世界中の人々にとって、それは人質事件以上の驚きであった筈だ。ニューズウィークの副編集長の目に《ただの「いじめ」》としか映らなかったということは、そうとしか映らないような「いじめ」を人質たちに対して見舞っていたということにほかならない。

『週刊朝日』（04.5.21）は、「高遠菜穂子さん『沈黙』に世界の同情 『変な国ニッポン』の人質たたき」の見出しで、世界の反響を次のように報告している。

《日本を席卷する「自己責任論」に、海外メディアは「これがニッポンの村八分か」と言わんばかりの反応だ。

際立った扱いは、米国の有力紙ニューヨーク・タイムズ。4月23日付の1面で「解放された日本人、拘束よりひどい苦痛」と題した記事を掲載。高遠さんらのイラクでの活動内容を紹介し、疲弊した高遠さんと平謝りの家族の写真とともに、こう評した。

「犯罪者のように扱われ、自宅で囚人同然の状態だ」

「政府に反して個人の目的を追求することは許されない」

ワシントン在住のジャーナリスト、池原麻里子さんの話。

「無事だった人質を責め立てるなんてアメリカでは考えられない。周囲では『理解できない変な国だ』という反応が大半。日本を知る人は『やっぱり出る杭は打たれる』とも言いますが、もしもブッシュ大統領が人質を批判したら、国民を守る大統領の職務放棄だと猛烈に非難されますよ」

その後も複数の新聞や放送局が「J I K O S E K I N I N」の文字とともに、人質を温かく迎え入れる欧米とは対照的な「謝罪の儀礼が要求される国」（ロサンゼルス・タイムズ）について報じた。こうした報道に触れた米国人男性が、「（政府から請求された）航空運賃を負担したい」と日本大使館に申し出て2千ドルの小切手を送ったほど。外務省は小切手を男性に返すというが、「変な国ニッポン」の姿はさらに広まっている。

仏紙「ルモンド」は2度にわたって「若者たちを誇るべきだ」と論じ、英国の有力紙「インディペンデント」と「タイムズ」が28日付でそろって自民党の柏村武昭参院議

員の「反日的分子」発言を引用しつつ、「小泉首相が先導した喜劇的な猛烈批判」(インディペンデント)などと報じた。さらにドイツやイタリア、韓国などでも、日本の人質バッシングが批判的に報じられている。》

かつて世界で「日本異質論」と揶揄^{やゆ}されたことがあったが、今や「変な国ニッポン」と呆れられているのだ。もちろん、外国から「変な国ニッポン」といわれているから、日本は「変な国」なのではない。人質事件に関して日本は「変な国ニッポン」を突出させているから、「変な国ニッポン」なのである。日本を「変な国ニッポン」とみることで、世界は二分されているというわけではない。少なくとも日本の人質バッシングに賛意を示す国が見当たらないことではいえる、世界の常識と日本の常識はここでは真正面から対立し合っている。世界の常識がおかしいのか、それとも日本の常識がおかしいのか、という問題であろう。日本の常識がおかしいと言い立てる世界に対して、もし日本が世界の常識のほうがおかしいと思っているのであれば、堂々と論破すればよい。ところが、人質バッシングに加担する政府もマスコミも市民も、弱い立場に置かれている人質やその家族に対しては容赦なく打ち据えるのに、世界に対しては一言も言い返せないのだ。

先の『週刊朝日』の記事は、『世界から孤立した形になった日本の言論風景が、自衛隊派遣をめぐる本来のイラク政策論議に立ち返るのはいつの日なのか』と続けるが、「変な国ニッポン」は人質事件で浮き彫りにされているだけでなく、すでに自衛隊派遣でも浮き彫りにされているのである。戦禍にあるイラクの「非戦闘地域」でオランダの軍隊に守られて、一切の戦闘を交えずに人道復興支援活動に従事する自衛隊という構図そのものが、すでに十分「変な国ニッポン」を突出させていた。自衛隊派遣が戦闘目的ではないことははっきりしている。だからといって、人道復興支援活動を目的としているわけでもないことは、その活動が規模においても、民間の協力を計算に入れない自衛隊の作業能力においても、あまりにも限定されている点で明白であり、本腰を入れたものではありえないことによって、当のイラク住民からすれば、やはり自衛隊の存在は「変な国ニッポン」にしか映らないだろう。

中途半端な自衛隊派遣は憲法9条と日米同盟の狭間に置かれているところに起因しているようにみえ、日本からすれば、その難題に直面している自らの立ち位置が「変な国ニッポン」として国際社会からみられるのであれば、それはどうにも仕方がないではないか、ということになるだろう。もし日本が「変な国ニッポン」であるなら、それは国際社会の矛盾を日本が背負わされているところにある。その矛盾が解消されないかぎり、日本は仕方なく「変な国ニッポン」でありつづけるしかないではないか、と日本は思っていると感じられるほど、日本はその矛盾の解消を目指して全力で働きかけているようには到底みえないのである。なるほど、憲法9条改正が叫ばれたり、日米同盟の見直しが主張されたりすることがあるけれども、それらの動きがポーズにしか映らないほど、そこからは日本国民全体に切羽詰まったギリギリの真剣さや覚悟といったものが立ち上

ってくる気配はない。

まあ、なんとかなるじゃないの、ということで、ズルズル、ズルズルと問題を先送りしつづけてきたのが戦後日本である（戦前の日本はけっしてそうではなかったといいきることにはできないとしても）。一度も立ち止まって自らの足元を見つめようとはしてこなかった。というより、一度も立ち止まらなくても、自らの足元を見つめようとしなくても、日本は一国の平和と繁栄にむかって突き進んできているようにみえた。立ち止まる間があるなら、足を前に出せ、であった。それでなんとなくやってこれたのである。しかし、問題は先送りされて、累積されつづけた。いつか立ち往生するときにやってくるかもしれないと不安に思うなかで、イラクへの自衛隊派遣問題が避けがたく見舞ってきたのである。そして日本は、それについてもこれまでと全く同じ問題の処理の仕方を行った。その処理以外の全く別の処理の仕方について考えてきたことはなかったのだから、それはきわめて当然のことであった。

問題に対する日本の処理の仕方については、「中途半端」と「場当たり主義」の言葉で要約することができるだろう。今回の自衛隊派遣問題についても、これで切り抜けようとした。自衛隊は軍隊ではないから現地で戦闘を行わないけれども、現地の復興支援活動に適切な作業部隊でもないことによって、現地で極めて効果の少ない復興支援活動に従事するという「中途半端」を大いに発揮し、アメリカとイラクの双方の顔を立てるという「場当たり主義」に引きずられているのだ。ここで明言しておくが、「変な国ニッポン」は国際関係の矛盾の真っ只中に日本が晒されているところにあるのではない。したがって、国際関係（のみならず）のなかで「中途半端」と「場当たり主義」をしいられているところにあるのではない。国際関係の矛盾を免れている国などどこにもないし、世界戦略として「中途半端」と「場当たり主義」にどの国も見舞われているだろうからだ。

問題は、「中途半端」と「場当たり主義」が戦略としてではなく、もはや日本特有の体質にまで馴染んでしまっているところにある筈だ。ここでもっと踏ん張らなくてはならないと思われる局面においても、「中途半端」と「場当たり主義」を両輪とすることで日本は切り抜けようとしてきた。世界から受け入れられない「変な国ニッポン」は、国際社会に対して「中途半端」と「場当たり主義」で対処せざるをえなくなってしまう日本から不断に突き出されてくるのだ。「中途半端」と「場当たり主義」は言葉を必要としないから、当然「変な国ニッポン」は言葉を持たない。つまり、日本は「中途半端」と「場当たり主義」で国際社会に対処しようとしたとき、「変な国ニッポン」として言葉を捨てたのだ。日本という国が世界の中でどのような立場に置かれているかについて、言葉を持って世界に語りかけていくという、別に珍しくもない常道を歩まずに、本当に必要とされている肝腎の言葉が空白の「中途半端」と「場当たり主義」で常にコトに当たろうとして、日本は「変な国ニッポン」という奇異な目で世界からみられていくのである。

日本人質事件は、「変な国ニッポン」が国際社会にむかってだけでなく、当の日本国内でも充満していることを曝けだしてしまったのである。「変な国ニッポン」は当然のことながら、人質やその家族に対する目にみえない市民からのバッシングだけでなく、日本政府の小泉首相にも集中してあらわれてくる。もちろん、そのバッシングにも言葉が不在であったが、言葉の不在を極めていたのは小泉首相であった。人質事件に際して小泉首相が最初に発した言葉は、「自衛隊は撤退しない」「テロには屈しない」であり、その後何度も同じ言葉を繰り返し、それ以外の言葉といえば、解放された人質が「イラクに残りたい」といったことで、「どれだけの迷惑をかけたのかをよく考えて、自重していただきたい」と顔をしかめて述べたことぐらいが記憶に残っているだけである。要するに、日本の顔である小泉首相が発したのは、先の二言であった。

この二言は保守派層には、毅然としていると非常に受けがよく、ブッシュの顔をほころばせるのに十分であったが、しかし、自衛隊の撤退を要求し人質の首を刎ねると脅す武装勢力への対応としては身も蓋もなかった。その態度表明はスローガンであって、いわゆる言葉というものではなかった。小泉首相からすれば、重要なのは「自衛隊を撤退しない」ことであり、「テロに屈しない」ことであり、それ以外に何を表明する必要があるのか、ということであったかもしれない。政府の方針として自衛隊派遣を決定した以上、なにがあろうとも途中で自衛隊を撤退させることはありえないから、武装勢力の要求に対してもはっきりとそう答えるだけのことであって、余分なことはなにもいわないという態度がそこにはありありと浮かび上がっていた。

いうまでもなく小泉首相の二言は言葉ではなく、言葉の不在をあらわしていた。態度はあったが、言葉はなかった。人質という事態が発生しても、自衛隊を撤退させる意思がないことについての説明（言葉）は一切なかったのである。人質という事態の発生に動揺している国民が聞きたかったのは、政府がその事態についてどう考えているのか、スローガンではなく、納得のいく説明（言葉）であった。本当に国民が納得できるかどうかは別にして、木で鼻を括ったような紋切り型の説明ではなく、国民の生命と財産を守る政府が言葉を尽くして、国民にむかって語りかける姿勢をこそ国民は望んでいたにちがいがなかった。小泉首相が日本国民にむかって語りかけなかったことは、世界にむかって語りかける言葉を持っていないということであった。世界は日本の首相の言葉を注視していたからだ。

小泉首相の二言はまた、武装勢力とは一切交渉しないことの態度表明でもあった。「自衛隊を撤退しない」ことを前提としたうえで人質の解放に全力を尽くすということは、（どんなかたちで全力を尽くすのかは全く不明であったし、人質が解放されるに際して日本政府がどんな重要な役割を担ったのかも全く不明であったが）「自衛隊を撤退しない」なら人質を殺すという武装勢力の要求が掛け値のないものであったときには、空言に等しかった。つまり、「自衛隊を撤退しない」という政府方針の前では人質の殺害も

止むなし、という非情なものであった。針の穴でも助かる方法があつたら、それに縋^{すが}りたいと懇願していた人質の家族が激怒し落胆したのは、問答の余地なく政府の非情さを真正面から突きつけられたからである。唯一の頼みの綱である日本政府に人質の生命が切^きって捨てられた、と家族が絶望感を抱いたのも道理であった。

民主主義とは言葉（言論）に尽きるとすれば、言葉（言論）が重視され、鍛え上げられていくことがない点で、戦後の日本がはたしてどの程度の民主主義国家として生まれ変わったのかは、はなはだ疑問であった。「変な国ニッポン」は、日本という国における民主主義の度合いに対する疑問符にほかならなかったのだ。厳密に解釈すれば、憲法 9 条に抵触するであろう戦後初の事態である自衛隊派遣について言葉を持たなかった日本政府は、その必然のようにして人質事件に対しても言葉を持たなかった。小泉首相の二言に毅然さを感じた人々は、その二言が言葉の不在にほかならないことをみなかったのである。首相の毅然さとは武装勢力に対するものであると同時に、人質の切り捨てに対するものであることをみなかったのである。人質を切り捨ててまで「自衛隊は撤退しない」ことを上位に置くのであれば、政府主導の姑息で卑劣な「自己責任論」の流布などでごまかさず、堂々と日本国民と国際社会にむかって、日本の置かれている立場を縷々^{るる}説明し、納得させようと努めるのが、民主主義国家としてのありかたではなかったか。

この問題について斎藤美奈子は、「人質問題にみるパフォーマンスの成熟度」（『婦人公論』04・11・22）として切り込んでいる。9 月 7 日の朝バグダッドで拘束されていた NGO 組織「バグダッドへの架け橋」のメンバーである、二人のイタリア人女性（共に 29 歳）が三週間ぶりに解放されて帰国した際の国内の反応を、4 月の日本人人質事件と比較している。

《二人がローマ空港を降り立った際、ベルルスコーニ首相は自ら空港に出迎えた。「私たちは元気です」と笑顔で語る二人の写真を見るにつけ、半年ぶりの怒りが改めてフツフツとこみあげてくる。「それにひきかえ日本はどーよ」と思うなっているというほうが無理。「自己責任論」とやらを麗々しく持ち出した外務官僚と政府高官。それに同調したメディア。保守系メディアの論調は、三人は自ら危険な地域に飛び込んで事件を招いたのだ、自己責任の自覚のない無謀な行動が政府や関係諸機関に迷惑をかけている、といったものだった。

ご記憶の通り、4 月 18 日、羽田空港に降り立った高遠さんら三人は憔悴しきっていた。空港には「自業自得」「税金泥棒」等のプラカードを持って立つ人までいたのだから、何をかいわんやである。

それにしても、イタリアと日本のこのちがいは何なのだろう。

二人の女性が拘束されていた三週間の間、イタリアでは数万人規模のデモが開かれ、チャンピ大統領は解放を訴える声明の中で、人道支援家である二人に賞賛の辞を贈ったという。こうした動きは以前にもあって、日本人人質事件が起きた 4 月にも、4 人のイ

タリア人男性がイラクで人質になっており、ローマで開かれた大規模なデモの後、ベルルスコーニ首相はデモの先頭に立った人質の家族を、国会本部に招待したという。その件に関して政府はノーコメントを通してているが、ベルルスコーニ政権は 100 万ドルの身代金を要求されていたともいう。

だからイタリアは人道的な国なのだ、といたいわけではない。ベルルスコーニ政権だって、ブッシュの政策に賛同し、3000 人の軍隊をイラクに派遣しているのだから、そこは同じなのである。ただ、なんていうのかな、これはパフォーマンスの問題なのだ。大人っぽさというんでしょうか。政治的な思惑がどこにあるにせよ、自分ちの国民が拘束されているときにですよ、「卑劣なテロには屈しない」しかいわないのと、デモ後の家族を招くのとどっちが成熟度が高いか。解放された自分ちの国民を空港で出迎えるのと、帰国費用を負担しろみたいなことをいうのとどっちがカッコイイか。

この政府にして、この国民。かかる民度の差は、もちろん市民の意識にも反映している。金儲けとは関係なく人のために働くっていう行為に、日本人は（といつちゃうが）なぜ敬意を払えないのだろう。政治的な活動に差別的な目を向けるのも、明治時代の人みたい。》

正攻法でいえば、まさにその通りであろう。正攻法のみでしか見ない外国人には「イジメ」としか映らない、この「変な国ニッポン」の動きにはもちろん、日本国内では変でもなんでもなく、人質の行為に敬意なんか払うよりも、戦地で生命の危険を冒してまで「正義」と「善意」を行使する、鼻持ちならない人質たちの振舞いに対して、「自業自得」「税金泥棒」等のバッシングに組したい、屈折した欲求が確かに渦巻いているのである。人質たちの行動にどうしてもムカつく感情を抑え切れないところがあるとすれば、それは人質たちの自分を肯定する行為に対して、自己肯定感を持ってない人々の反感が剥き出されているように感じられる。つまり、自分自身に対する欠損感情を人質たちに対してぶつけているだけであり、結局のところ人質に対する問題ではなく、自分たち自身に対する問題でしかないのだ。

そう考えるなら、斎藤氏が提出している「人質問題にみるパフォーマンスの成熟度」という問題は、《「卑怯なテロには屈しない」しかいわない》ではなく、それしかいえない首相の政治家以前の、人間的な存在の幼さを、そして人質バッシングに垣間見られる国民の人間的な存在の幼さを見事に浮き彫りにしていたように思われてならない。言葉を持たずにやりすごし、言葉によって自分を立て直してこなかった戦後日本の社会の昏迷の深さがそこに一気に引きずりだされてきているのではなかったか。「パフォーマンスの成熟度」の高さを示していたのはむしろ人質たちのほうであり、内輪の問題としてしか見られなかった人々は、自分を越えたところのパフォーマンスという次元以前の問題でしかなかったのだ。

2005年5月1日記